

内湖再生全体ビジョンの概要

～価値の再発見から始まる内湖機能の再生～

現状と課題

内湖の価値を暮らしに利用

○内湖利用の歴史

古代～中世 漁場、港、周辺には城下町等として
～近代 排水の放流先、漁業など生業の場として
底泥、水草・・・肥料として利用
ヨシ・・・屋根材、よしずとして利用

現代 = 暮らしの中で内湖の価値が低下

⇒ 開発による内湖の消失や機能の低下

- 「内湖の価値」
- ① 自然環境・生態系としての価値
(琵琶湖の生態系を支え、生物多様性を維持する)
 - ② 緩衝地帯としての価値
(波浪等を穏やかに保ち、流域からの水や負荷を留める)
 - ③ 人の暮らしを支える価値
(水源、生業の場、景観・文化の一部、レクリエーションの場)

<内湖の特徴>

- ・琵琶湖とつながっている(生物等の移動が可能)
⇒琵琶湖と内湖は密接に関係し合う1つの系(水域)
- ・琵琶湖全体のおよそ60%のヨシ等抽水植物が生育
⇒在来魚類の重要な産卵・繁殖場
- ・里山型の二次的自然、いわば「里湖」
⇒人の手が適度に加わることで、その存在の維持が可能

○現れている問題

- ・在来魚類の減少をはじめとする琵琶湖生態系への影響
- ・汚濁負荷の直接流入など琵琶湖水質への影響
- ・ふなずしやヨシ葺き屋根、よしずの利用の減少など内湖と人が育んだ生活文化への影響

価値の再発見から始まる内湖機能の再生

内湖の再生に向けて

<ビジョン1> 基本理念

「内湖の価値を再発見し、その本来の機能を再生し、琵琶湖や人とのつながりをつくる内湖づくり」

<ビジョン2> 基本方針 次の三つの価値を重視し、その機能を再生する。

①自然環境・生態系としての価値 ②緩衝地帯としての価値 ③人の暮らしを支える価値

<ビジョン3> 特に重視すべき価値 「琵琶湖流域の生態系を支える価値」

(ステップ1:価値の再発見) 人の暮らしの場での内湖の価値を見つけ、人と内湖の関わりを再生する
(ステップ2:機能の再生) 琵琶湖～内湖～集水域の物理的な場のつながりを確保する
(ステップ3:成果の現れ) 内湖の価値が高まり、琵琶湖の在来魚介類のにぎわいがよみがえる

<ビジョン4> 内湖再生の全体としての目標(目標年度2020年)※マザーレイク21計画「内湖再生プロジェクト」と整合

「内湖を再生することにより、在来魚や希少動植物など豊かな生態系を回復するとともに、暮らしを湖に近づけ、琵琶湖と人とのより良い関係を築き、地域資源を活用した社会成長を目指します」

内湖再生のイメージ

・ハード的、ソフト的な対策
・地域等との関わり

・順応的な管理手法
・住民・関係者参加のデザイン

既存内湖

農村型コミュニティを背景に、人と人、人と内湖、生きもののつながりを取り戻す

◎主な対策メニュー

- 魚類移動の連続性の確保
魚道の設置等
- 体験型環境学習の取組等
自然観察会の実施 等

新規内湖

人々の憩いの場、南湖における在来魚の産卵、生育の場としての価値を高める

◎主な対策メニュー

- 内湖と触れ合う
親水施設の整備等
- 在来魚類の産卵の場となる基盤整備
緩傾斜護岸化、ヨシの植栽
水草の刈取 等

消失内湖

内湖の再生やクリークなど残された水域の内湖的機能を高め、地域とのつながりを再生する

◎主な対策メニュー

- 早崎内湖(20ha)の再生
- 内湖的機能の再生
ヨシの植栽、魚類の放流等
- 内湖(水辺)との関わりが復活する等
自然観察会の実施 等

○内湖再生に向けた課題(4つのハードル)

①地域特性を踏まえた価値の再発見 ②財源の確保 ③制度上・技術上の課題 ④持続的な取組の仕組み

地域主体で進める各内湖の再生に向けた取組